

こんにちは、こんばんは、おはようございます。そして明けましておめでとうございます。心に風邪を引いたワタシも、そうでないアナタも、みんながつどえるミニコミ誌『みんつど』のお時間です。編集長の天地成行（てんち・なりゆき）です。54号を迎えました。今回のトピックは東京や下関市からの寄稿特集です。全

「みんつど」 第54号

体的に写真には、看護師とアーティストの”二刀流”池見陽子さんを抜擢。連載で使うはずだったものをお送りします。オープニングアクトは、一人三役脳内会話「天地成行あり方委員会」。Cさんがなんだか年始から情緒が不安定。その秘密は例の元旦のニュースのようです。4ページの今号。はじまりー。

今年もヘンテコ！一人三役脳内会話「天地成行あり方委員会」

（ナレーション）

普段、言いたい放題の
暴れ者・天地成行Cさん
がずっと一年と年始から
落ち込んでいる。普段、

落ち込んでいる天地成行
Bさんがそつと見守って
いる。どう声をかけよう
かと寄り添おうとしてい
る。普段、二人を優しく

見守っている天地成行A
さんが、やはり二人の様
子をつかがう。

天地成行B：Cさん、C

さん。2026年が始まっ
てもう一月が終わろうと
しているよ。元旦からずっ
と部屋の隅で体育座りし
て、ため息ばかり。さす

がの僕の専売特許をとら
れてしまつとまいっちゃ
う。どうしたんだよう。
そろそろ口を開いてくれ
ないかい？

天地成行C：お、おう。

Bよ。すまんのお。おま
え気づかんかったか？

天地成行B：え、なんす
か？

天地成行C：わしらのス
マホで「天地成行の彼女」っ
てエロサしたことがあるか？
Bよ。

天地成行B：そんなこと
しませんよ。Cさんじゃ
あるまいし。

天地成行C：検索してみ
ろ。

（びびること検索）

天地成行B：はい。しま
したけど、それがなにか？
（二面につづく）



天地成行C：なら「動画
タブ」にしてみよう。

(びびこ)

天地成行B：あれっ、な
んだこりゃ？「長澤ま
さみ」の動画だ。なん
だろうね。

天地成行C：出ただろ！
それで元旦の芸能トッ
プニュースはなんだっ
たか覚えてるか？

天地成行B：あつ、長澤
まさみさんが「SHOGUN
將軍」の映画監督の福
永壮志さんと、ご結婚と
いう超ビッグニュースが
ありました！えっ、C
さん、もしかや、「天地成
行の彼女」として長澤ま
さみさんを本気で認識し
ていてショックを受けて
いたの？

(うなづくC。体育座り
のまま)

天地成行B：え……。あ
はははじゃないのー。あ
ははははー。ほれ、Aさ
んも思わず吹いてらー。



かっかっかっかー。

(C、次第にムカついて
きてむくつと立ち上がり、
おもむろにBを得意技の
「どすこーい」でつきと
ばす)

天地成行C：ばかたれー、
からの焼肉のたれ……！

天地成行B：いつて……。
そして今年もやはりでたー。
「ばかたれからのたれシ
リーズ」。いつて。

天地成行C：わしゃー、
統合失調感情障害なんじゃ。
妄想をえさに生きている
ふしもある。じゃから、
山崎まさよしの歌のよう
に「♪いつでもさがして
いるよー、どっかにきー
みーのすがたをー」と向

かいのホームや路地裏の
角、桜木でも探していた
のだ。それなのに……。

天地成行B：あのね、C
さん。歌の桜木町は横浜
なんだよね。周南市の桜
木にいるはずないよね。

その妄想ぶりは、チュー
トリアル・徳井義実さん
が、かつてのM1決勝で
披露したやつ並みだよー。
まあ、こちらはモノホン
ですが。

(Aも思わずくすくすす
る)

天地成行C：おい、Aま
で笑うてか。わしゃー、
本気じゃったのに。

天地成行A：さあ、Cさ
ん、シチューがまってる。
「♪おうちへかえろーう」

天地成行B、C：おー、
山崎まさよしで返した！

天地成行A：まあ、結局
ここは家なんですがね、
えっへっへ。

天地成行B、C：だよねー。

□ □ □

(ナレーション)

今年も、一人三役脳内会
話「天地成行あり方委員
会」を宜しく願いま
す。

次のコーナーは、急遽みんなつどにゆかりがある方に寄稿をお願いしました。その中でお忙しい中サクッと対応していただいた、東京都町田市のMさん、下関市の塩見直紀さん、日本赤十字社本社の横山瑞史

さん。このお三方の記事をみなさんにご紹介します。楽しかったり、勉強になったり、さすがにいろんな経験と視座がございます。編集して楽しい。これも「みんなつど」の魅力でしょう。

東京の地元・節目・能登半島地震対応の話

みんなで分かち合おう

「地元の話」

(東京都町田市・M)

私は、(ペンネームの通り)東京都の南部に位置する町田市に住んでいる。サッカーJ1・町田ゼルビアの活躍でその名を知ったという方も多いと思うが、いわゆる多摩地区に属する自治体で、高度経済成長期に急激に都市化が進み、今では人口40万人を超えるそれなりに規模の大きな都市だ。ちなみに、横浜市と相模原市に隣接していることから、「マチダって神奈川県だよ」という冗談をたまに耳にするが、実際、かつて神奈川県に属していた時代もある。

そんな町田で生活を始めて、今年で6年目になるが、思った以上に地域活動が活発であることに驚かされる。「東京」と聞くと、大都会のイメージで地域の付き合いは希薄だと思われるかもしれないが、人口が多いこともあってか、お祭りや各種行事はそれなりに開催されており、参加者も多い。例えば、近所の普段は静かな小さな神社でもお正月の初詣では境内に長蛇の列ができ、お酒のふるまいなども行われる。つい先日、子どもの自転車の練習につきあつて恩田川(桜の名所で横浜市内で鶴見川に合流する)沿いをサイクリングして

いるときも、団地の公園でどんど焼が行われているのを目にした。開発が進んで周りを見渡せば近代的な住宅地ばかりのようにもみえるが、人びとの付き合いという点では農村らしさのようなものが残っている。そんなところに町田の生活の場としての魅力を感じているのは、私だけではないだろう。

「二十四節気」は立春(春の気始めて立つ)がスタートとなります。⑤昼と夜の長さがちょうど同じとなる春分。この日もとても大事にされまね。⑥最後は年度の終わりと始まりの3月末〜4月1日です。ちなみに私は4月4日が誕生日なので、7つあることになります。

8つにどんなことでもいいので叶えたいことを書いてみてください(例、富士山登山、積読解消など)。今年もいろいろ大変なことがあるかもしれませんが、小さくとも希望の芽を探していけたらいいですね。希望の種をこの世に、地域にまいていきましょう。

「能登半島地震現場派遣のこと」
(日本赤十字社広報室(赤十字情報プラザ)・横山瑞史)

①冬至⇨昼間がいちばん短い12月のクリスマス頃もそんな1つです。陰極まれば陽となる、ですね。中国のある少数民族はこの日をお正月としているようです。

私たちは後世のためにももつともつと変わらなといけない、そんな大切な時期を生きています。ゆっくり、でもしっかりと。できることから変化していけたらいいですね。

そんな大事な節目のいま、おすすめのワークを2つご紹介しましょう。1つ目は昨年の「自分の出来事ベスト10」をあげるもの。小さなことでいいので、良かったことをあげてみてください(例、人や本や映画との出会いなど)。2つ目は「人生で叶えたいことほ?」。

3×3のマス目の中央にこの問いを書き、周囲の

「節目」
塩見直紀(半農半X研究所/下関在住)

②大晦日⇨お正月。ふつうはこの日が最も大きなりセット日ですね。

③旧正月もそうです(今年は2月17日)。新月がスタートというのも現代人には逆に新鮮!

④節分⇨立春も大事です。

真冬から春にかけての



看護師でアーティストの”二刀流”の池見陽子さんが2023年5月にカナダで個展をして、それを見学する地元の人たち

出発直前、上司から「避難所では決して笑わ

ないように」との忠告を受けたが、それは言わず

ドクターが、看護師とともに巡回診療を始める

もがな。救護活動中の笑顔・笑い声は、受け取られ方・切り取られ方次第で、不謹慎との批判を招きかねない。

最初の取材先となった輪島市内の避難所では、男性

ころだった。ちょっとした体育館ほどの広さがある板張りの床の部屋で、医師と避難者双方から取材の了解をとりつつ耳をそばだて、メモをとる。

このドクターは、自己紹介のあとほとんど体調や病状について質問しようつしない。いつまで世間話が続くのかと思った矢先、女性の声が涙声に変わり、徐々に激しく、大きくなる。ドクターは、ほとんど黙ったままその声に耳を傾けている。私はその場から離れる。余計な刺激を与えてはいけないと思ったから、というのは後づけで、そこにはいけない、というより、いられない、と感じたから。ところが不思議なことに数分後、涙声は笑い声に変わっていった。

20組以上の巡回診療を終えたドクターを追いつ、避難所の一角にある日赤救護班控室に入ると、今度はベテラン看護師長の声が……。

「先生、笑わないでください！笑わせないでください！」

「ゴメン、ゴメン」を繰り返すドクターは日赤救護班のリーダーである。

みんなにおやじギャグを仕掛けて笑わせようとしていたのだ。それはもう習慣になっていて、おいそれとはなおせないに違いない。

インタビュー取材を依頼すると、「悪いけど2時間くらい待ってもらえる？あともうひとりふたり診なきゃいけない患者さんがいるんでね」と返された。それならと「いつまでもお待ちしてます！」と最敬礼したところ、「やるな！」と一言残して次の患者のもとへ。後ろ姿が笑っていた。

15分後、もどったドクターに、プロの外部委託カメラマン自らカメラを回しながら質問を始め、私はわきでメモをとる。この日の朝からふたりでインタビューを続けるうち、私が全部聞くより、カメラマンがまず典型的

な質問をし、そのあと私が気になったことを追加で質問するほうが効果的なことが、ふたりの暗黙の了解事項になっていた。

ひととおりの質問を終え、「横山さんから何かありますか？」のパスを受け、私は、

「今日、わずかな時間でしたが、先生の巡回診療の様子や控室でのやりとりを拝見してぜひお聞きしたいと思ったのですが、『笑い』というものに対する先生のお考えをお聞かせいただけないでしょうか？」とぶつけてみた。

ドクターは、「ゴメン。カメラとめて……」と後ろを向き、しゃがみこんでしまった。

数十秒の沈黙のあと、ドクターは立ち上がり、目を赤く腫らしながら、「ぼくは、笑顔が見たくて医者になったんだ。ゴメン。」と一言。

私は、無言でドクターの両手を強く握りしめた。
